アルベール・ベガン「不可視なるもの」をめぐる冒険
―　「ロマン的魂」とバルザック　―

東海　麻衣子

はじめに

アルベール・ベガンが没してから 20 年後の 1977 年、ジュネーヴ州の小さな村、カルティニーにて、アルベール・ベガンとマルセル・レイモンについてのシンポジウムが開かれた。そこで一同に会したのは、ジョルジュ・プーレ、ジャン・ルーセ、ジャン・ストロバンスキといった大批評家たち。彼らは、数日間にわたり、ベガンとレイモンの残した偉大な仕事について、議論を交わした。

その中で、プーレは、40 年前、はじめてベガンの『ロマン的魂と夢』を手に取ったときの感動を語るとともに、ベガン批評の出発点となる精神について、端的に分析してみせている。

> 「我思う・我あり」と断じるかわりに、ベガンは、こう言っているかのようだ。「あるのは我なのか」。彼の出発点はすなわち、不可知、あるいは、存在の欠如の確認と言ってもいい [1)]。

プーレは、「私は夢見ている存在ではないか」と常に疑うベガンの姿を映し出す。そして、さらに、次のように言う。

> 自己認識におけるベガンの決定的な進歩は、自己からの脱出、孤独との決別にかかっている。ミスティックたちの言語を用いながら、ベガンは書く。「切り離された私を乗り越えなければならない」。ゆえに、何よりも大切なのは、他者とつながることであり、交流 、あるいは、ベガンがより頻繁に用いる語によれば、共通感覚 の中に入っていくことなのである [2)]。

ジョルジュ・プーレによるこの分析は、ベガン批評の核心をつくものだろう。

ベガンの批評とは、他者を媒介にして、さらに他者に「同化」« identification » す

ることによって、自己を探究し、「乗り越え」ようとするためにある。さらにそこから、共同体との「同化」すなわち、すべての人との「共通感覚」« communion » を得ようとするものであると、プーレは言う[3)]。

ゆえに、ベガンは、自己をその内に見出すことができる精神のみを、批評しなければならなかった。その批評行為は常に、不可知である自己を、そしてその自己が把握しきれない何ものかを探究するための、やむにやまれぬ衝動に基づくものであったのだから。

ベガンは、ネルヴァル、ペギー、ブロワ、ラミュズ、パスカル、ベルナノスをはじめ、ロマン派から、シュールレアリストまで、多くの文学者を論じたが、彼らは皆、ベガンと同質の精神をもつ者たちである。すなわち、人間は不可知であり、不可視なものに取り囲まれて生きているという認識から出発し、直感だけが知りうるこの領域に踏み入ろうとする作家たちである。彼らは、常に、根源的不安と闘いながら、言葉にし得ないものを言葉にしようと試みる。ベガンは、こうした魂を「ロマン的魂」として、『ロマン的魂と夢』の中で論じた。

しかしながら、その中にあって、一人だけ抜きんでている作家がいる。ロマン主義的でありながら、他の詩人とは一線を画す「幻視者」« visionnaire »、オノレ・ド・バルザックである。

『ロマン的魂と夢』に付された 1939 年の緒言を見てみよう。

> 私がより遺憾に思うのは、二人の天才に対して正当な位置づけを行えなかったことである。私にとってとりわけ大切で、また、少なくとも彼らの作品のいくつかの面において、私の探究が向かうべき方向にまさしく位置している二人の天才、つまり、バルザックとクローデルである。弁明すると、彼らは二人ともあまりに偉大すぎ、まったく異なるやり方で、あまりに「独特」であるために、この書において、私が検討するような限られた伝統のうちに含めることは無理だと判断したのである。だが、私は、彼らの教えを、たった一章ではなくもっと大きなかたちで、再び取り上げることをあきらめてはいない[4)]。

さらに、『ロマン的魂と夢』において、この「二人の天才」を並べてみると、クローデルに関しては、多くの引用と言及が散見できるのに対し、バルザックに関しては、その作品や精神に触れた箇所が一切ないことに気づく。ベガンにとって、バルザックを、その他の魂と並列させることは、どんなかたちであっても不可能であっ

たのだろう。そして、ここで取り置かれた情熱は、『幻視者バルザック』を皮切りに、『バルザック小選集』12 巻、『バルザック全集』14 巻の編集、個別作品の刊行、序文、エッセーとなって結実する。一方、クローデルについては、その後、まとまった著作として公刊されることはなかった。

こうしたことから、我々は、ベガンにおけるバルザック研究の特権的地位を認めるのだが、その理由は、ベガンが論じた多くの「ロマン的魂」において認められる特質を、バルザックが最も豊かに体現しているからにほかならない。では、一体、その特質とは何だろうか。

1937 年、学位論文として執筆された『ロマン的魂と夢』[5)]、そして、1937 年から 1939 年に執筆された『幻視者バルザック』[6)]。この二つの代表作を比較分析することは、アルベール・ベガンの批評に対する基本姿勢を、理解するのに役立つだろう。

本稿では、ベガンが「同化」しようとする「ロマン的魂」の特質を把握し、その上で、バルザックの天才の強度を推し量ろう。それによって、アルベール・ベガンの試みた冒険の意味を考えてみたい。

1.「ロマン的魂」

『ロマン的魂と夢』第一章において、ベガンは「一人の特異な作家」[7)] として、リヒテンベルグを取り上げ、引用とともに次のように語っている。

> 「多くの点で、こうした観念が完全な明晰さへと導かれえないことはきわめて幸福なことである。なぜなら、たとえ人間が自然のこのような秘密を洞察しうる可能性が大いにあるとしても、人間がそれを立証することは、自然の利益にまったく反することであろうから。」
>
> 　してみれば、恐怖が彼をとどめ、われわれの真の条件である不知を彼に祝福させるのだ[8)]。

ベガンは、不知 « l'ignorance » を「われわれの真の条件」ととらえる。不知であるとする認識は、目に見える現実以外に、自己の知りえない何ものかが存在するかもしれない、その可能性を認めるということである。では、「何ものか」とは何だろうか。ベガンは次のように言う。

> 　統一性を知覚すること、このことこそロマン派の人々が外界に適用する前提である。だがこの前提は、まったく内的な、かつ、まさしく宗教

的な体験にその根源を有している。すなわち、この出発点は、あらゆる時代、あらゆる流派のミスティックたちの出発点である。ミスティックたちにとって、根源的主題は、聖なる統一性である。彼らはそこから除外されていると感じ、そこへ神秘的合一によって戻ろうと渇望している[9)]。

「ロマン的魂」なるものは、すべからず、こうした絶対の探究に赴くよう、運命づけられている。そのため、彼らは、ときに、信仰に救いを求める。ベガン自身も、39 歳の時、カトリックの洗礼を受けている。しかしながら、ベガンが信仰の内に没我し、救われることは決してない。以下の言葉は、それを裏付けるものだろう。

だが、彼（モーリッツ）は、自分が提起する問いに答えを出すことがまったくできない。一つの行為のほかには、答えはまったくないからである。すなわちその行為とは、光を存在するもの一切に伝達する、ある実在にたいする信仰行為、いいかえれば人間の節度が不可解なものに深くはいりこむのを断念し、この不可解なものを説明しようと熱望せずにこの世に生きることを甘受する、まったく単純な行為である[10)]。

ベガンにとって、カトリック信仰は、「ある実在」を崇め、神秘に頭を垂れる行為であって、それ以上ではない。その行為にしがみつき、「この不可解なものを説明しようと熱望せずにこの世に生きることを甘受する」ことではないのである。では、この「まったく単純な行為」によって、問題を解決することはできないとしたら、ベガンの赴くべき場所はどこなのだろうか。

無意識の深淵にこそ、われわれの生の完全な豊かさは属しているのだ。だがいかにしてそれを知覚するのか？ 内部の冥府への下降はいかにして行われるのか？ 言葉によって、またポエジーによってである[11)]。

ベガンにとって、夢や無意識は、目に見える現実の源泉である。詩人たちは、神秘の世界がより身近に感じられるその場所に降りていき、そこからポエジーを拾いあげてくるのだ。そして、その「冥府への下降」はまた、自らの幼年期にもつながっている。ベガンが引用するモーリッツの言葉が、その意味を物語る。

幼児のイデーは、切れやすい糸のようなもので、この糸によって、私たちは生命の鎖につながれるのであるが、可能なかぎり、それ自身で存在する孤立した生命であるようにつながれているのである。この場合、私たちの幼時は、忘却の河であるにちがいない。私たちは、前世や未来の全体のなかに溶けこまないように、また適度に制約をうけた個性を持つように、この河から水を飲んだのであろう。私たちは一種の迷路のなかに置かれている。私たちは、私たちの脱出を可能にする糸を見いだせない。おそらく、この糸を見出してはならないのだろう。― それで私たちは私たちの［個人的な］思い出の糸が切れる箇所に歴史の糸を結びつけ、かつ、私たち自身の生が私たちから逃れさるときに、私たちの祖先の生のなかに生きるのである[12)]。

ベガンが「驚くべき一節」[13)] として引用しているモーリッツのこの言葉は、「ロマン的魂」が拠って立つ幼年期の意味を明らかにしている。

モーリッツにとどまらず、「ロマン的魂」は、「さまざまなイマージュを信じ、現実という外界と想像という内界とが存在することを知らなかった、幼年という黄金時代」[14)] を意識的、無意識的に回想することによって、源泉に回帰しようとする。それは、彼らのポエジーが自伝的であるということではまったくない。精神分析的方法に疑問を抱くベガンにとって、重要なのは、歴史的事実ではなく、象徴なのである。

では、夢や無意識、幼年期の内に、彼らは何を探ろうとしているのだろうか。

合一を、確実さを、「実在」を求める呼び声や欲求に答えるものは何もない。あの神秘的で予告的な稀な瞬間をのぞいては。その瞬間には、自然発生的な記憶が、われわれに語りかけるように思われる。何かが、現存している何かがある、と[15)]。

この「現存」« présence » という言葉が、ベガン思想の核を成す[16)]。「現存」とは、目に見える現実の中に、何ものかがあるということである。神の「現存」を表す大文字の « Présence » よりも頻繁に、ベガンは、小文字の « présence » を用い、不知な人間が、決して認識できない何ものかの「現存」を信じる。

ここで重要なのは、この「何ものか」が、まさに「現実」の中にこそ見出されるという信念である。それゆえに、彼は、現実主義者も観念論者も共に退ける。目に

見える現実のみを信じる者と同様、生の不合理性に幻滅し、現実から、ランガージュの檻の中に身を潜める者にも共感しない。ベガンの愛する詩人たちに共通するのは、夢想や郷愁に浸りながらも、「いまここでこそ生きる必要性」 « la nécessité de vivre déjà *hic et nunc* » [17] を強く意識する者たちに限られるのだ。

そして、他の「ロマン的魂」とバルザックを隔てている最も重要な差異は、ほかならぬこの「現存」のうちに見られるのである。

2. 幻視者バルザック

『幻視者バルザック』の冒頭には、バルザックによる以下の言葉が引用されている。

> 僕という人間は万人にとって不可解なのです。なぜなら誰も僕の生の秘密をにぎっていないからで、また僕は何ぴとにもそれを明かす気はありません [18]。

バルザックが明かさなかった以上、彼の「生の秘密」がいかなるものであったのか、我々には分かりようもないのだが、ベガンは、それをできる限り解き明かそうとした。そして、ボードレールら少数の人々にしか認められていなかった「幻視者バルザック」の姿を、この書においてはっきりと映し出した。それまで評価の低かった「哲学的研究」に正当な評価を与えると共に、通俗的としか思われていなかった風俗小説群に、暗示された「内的な生」[19] を見るという読み方を改めて提示したのである。

バルザックは、人間の感知し得ない神秘の存在を認めていた。他のロマン的魂と同じく、それによって、彼も、根源的苦悩を強いられる。その苦悩の痕は、『ルイ・ランベール』や『絶対の探究』等の「哲学的研究」のうちに残されている。バルザックの化身たちは、狂気の淵をさまよいながら、絶対を探究しようとする。ベガンは、「哲学的研究」のうちに見られる一連の神秘主義的作品に、かつてないほどの重要性を見出しているが、しかし、バルザックがこうした作品のみを残したのであったとしたら、ベガンのバルザック研究は、これほどの広がりを見せなかったであろう。「哲学的研究」に対して、『ロマン的魂と夢』の「たった一章」を捧げるにとどまっていたかもしれない。というのも、ベガンが、バルザックを別格に扱ったのは、ほかでもなく、バルザックの小説群が内包する「現存」の大きさゆえだったからである。ベガンは次のように言う。

真のバルザック的神話、すなわち彼の根源的な苦悩に答え、神秘についての彼の知覚を訳し出していることから、彼にとって真の思考形式になっている神話、それは初期の短編においてと同じほどに、でなければもっとそれ以上にさえ、「写実主義的な」彼の小説のなかに見つけ出せると私は信じる[20)]。

そして、「写実主義的」ではない『セラフィタ』を「例外的な道」として、以下のように分析する。

このように例外的な道で試みられた体験が彼に示唆したこと、それはまさしく、人間の精神的上昇はどんなに高く達しようとも所詮地上の物語であり、うつし身の物語である、ということだ。真の神話は日常のなかで、時のなか、生身の世界のなかで創造されるものでなくてはならない[21)]。

ベガンは、セラフィタの悲劇が象徴する初期の幻想物語が、こうした教訓をバルザックにもたらしたと言う。そして、その教訓から、バルザックは、『ゴリオ爺さん』や『幻滅』を、象徴の世界として描いたのである。

自分はほんとうに生の中にいるという感情を人は持っているが、もし知覚し得るものが不可視なるものの象徴や発顕でなかったら、そうした感情はもてないだろう。なぜなら生というものは、自然主義作家たちがお粗末にも信じたように、その直接的な外観に限られているのではないからだ。生が生たりうるのは、そのぐるりに、すなわちその真上とその真下、かなた高く、また低くに、とりわけその内部に、それを越えたなにものかが考えられまた知覚される時だけである。このように生をその真の現実において眺めるためには、夢想を喚びおこす時よりもさらにいっそう幻視の力を備えていなくてはならない[22)]。

ベガンはまた、チボーデの言った「『人間喜劇』は父なる神のまねびである」[23)]という言葉に重要性を見出す。バルザックは、この現実社会を「不可視なるものの象徴や発顕」« le symbole et la manifestation de l’invisible » ととらえ、神の御業を理解

するために、その模倣を行った。他の「ロマン的魂」が「夢想を喚びおこす」にとどまったのに対し、バルザックは、天才的な「幻視の力」をもって、「生をその真の現実において眺め」ようとしたのである。

むすびにかえて

以上、我々は、アルベール・ベガンの二大著書『ロマン的魂と夢』そして『幻視者バルザック』を比較することによって、ベガンの思想を理解しようと努めてきた。では、ベガンの冒険とは、何を目指すものだったのだろうか。

ベガンの親友であったマルセル・レイモンは、「アルベール・ベガンの道程 1930－1940」と題する、アルベール・ベガン著作集『夢の現実』の序文において、次のように述べている。

> ミスティックというものは、「存在の衰退」にほかならない「時」« temps » から、解放されようとする。と、フェヌロンは言う。一方、ベガンは、「時を飛び越え、時の中で、時によって」« d'un saut du temps, dans le temps, par le temps » 、完全な人間性を目指すことを夢見る[24]。

レイモンは、ベガンと自分が、やがて訪れる戦争という悪夢を予感し、現実から目を離せないでいたと語っている。その中で、ベガンは、ポエジーによる現実の変容を目指した。その「主観的」で「共感的」« sympathique »[25] な批評活動は、暗黒の時代を目前にしたベガンの切羽詰った選択だったのだろう。

ベガンは、『ロマン的魂と夢』の序論において、次のように述べている。

> 客観性というものは記述的諸科学の掟であり、おそらくそうでなければならないが、それは精神の諸科学を有効に支配することはできまい。この意味におけるいっさいの「私心をさしはさまない」活動は、おのれ自身と、研究される「対象」とに対する、許しがたい背反を要求するのだ[26]。

それゆえ、ベガンは、体系的な書物をものしようとはせず、「個人に関わる避けられない問いの存在を実感する」[27] ための探究を行うべく、独自の方法を採用した。それはまた、次のような信念に裏付けられている。

これらのロマン主義的原理に、わたしが自分の探究の手つづきを一致させようと試みたのは、わが詩人たちと哲学者の場合のように、ひとがおのれのうちにあるものしか識りえず、ロマン主義についてはロマン主義的にしか語りえないことを、わたしが確認したからである。ゲーテ的な一視点（だけ）からゲーテの同時代者たちを裁こうとした、あまりにも多くの批評家の挫折が、共感以外の方法に対して、わたしを警戒させるのに充分だったのかもしれない[28)]。

分類することも定義を下すこともせず、ただ、「共感」« la sympathie » という方法のみに拠るベガンの批評。その無謀とも思われる企てによって、ベガンは、「ロマン的魂」に寄り添い、バルザックの奥深さを見出した。こうして、ベガンが意図したこととは、新たなテクストの読みへ、さらなる夢想へと、読者をいざなうことであった。読者は、ベガンに導かれ、詩人たちのテクストから、「われわれの運命という旋律を、他のすべての旋律のあいだから耳を澄まして聞き取る」[29)] 方法を学ぶ。

それは、やがてやってくる悪夢、「唯一の現実となり、実在しないロマン主義的な世界、夢の世界にまで侵食してくるだろう」悪夢[30)] の予感に導かれ、ベガンが必死に鳴らした警鐘であったのではないだろうか。— 今必要なのは、「不可視なるもの」を分析することではなく、感じることであり、それが、全体主義的思考から解放される方法なのだ。— アルベール・ベガンは、その「不可視なるもの」をめぐる冒険を通して、我々にそう訴えているように思われるのである。

注

1) *De l'identification critique chez Albert Béguin et Marcel Raymond* par Georges Poulet dans *Albert Béguin et Marcel Raymond, colloque de Cartigny*, sous la direction de Georges Poulet, Jean Rousset, Jean Starobinski, Pierre Grotzer, José Corti, 1979, p.16.

2) *Ibid*., p.20.

3) « La communion recherchée par Béguin est en réalité une identification ; une identification avec les autres, avec tous les autres, et cela par l'intermédiaire de tel ou tel poète qui lui sert de truchement ; car sans ce truchement, c'est-à-dire sans une identification première avec une pensée individuelle, Béguin ne pourrait arriver à l'identification seconde, collective, qui est pourtant chaque fois, explicitement ou de façon voilée, la fin poursuivie par toutes ses activités critiques. » (*Ibid*., pp.25-26.)

4) Albert Béguin, *L'Âme romantique et le rêve : essai sur le romantisme allemand et la poésie française*, José Corti, 1991, pp.III-IV.
なお、同書の邦訳は、小浜俊郎・後藤信幸共訳を参照させていただいた。

5) 『ロマン的魂と夢』は、1937 年、学位論文として提出、Cahiers du Sud 社より二巻本として出版された後、1939 年、緒言とともに一巻にまとめられ、José Corti 社より出版された。

6) 『幻視者バルザック』は、1946 年、Skira 社より出版されたが、同書の巻末には、ベガン自身によって、執筆年が 1937 年－1939 年と記されている。

7) Albert Béguin, *L'Âme romantique et le rêve*, p.13.

8) *Ibid*., p.16.

9) *Ibid*., p.92.

10) *Ibid*., p.43.

11) *Ibid*., pp.71-72.

12) *Ibid*., p.54.

13) *Ibid*., p.55.

14) *Ibid*., p.539.

15) *Ibid*., p.39.

16) Cf., Albert Béguin, *Poésie de la présence : de Chrétien de Troyes à Pierre Emmanuel*, Baconnière, 1957.

17) *Ibid*., p.51.

18) Albert Béguin, *Balzac visionnaire*, l'Âge d'Homme, 2010, p.13.

なお、同書の邦訳は、西岡範明訳を参照させていただいた。

19) *Ibid*., p.17.

20) *Ibid*., p.75.

21) *Ibid*., p.76.

22) *Ibid*., pp.76-77.

23) « Concurrence à l'état civil est le terme extérieur et conventionnel qui implique, dans l'intérieur et dans le réel, la collaboration avec le Créateur, et cette *Imitation de Dieu le Père* latente dans la *Comédie Humaine*. » (Albert Thibaudet, Histoire de la littérature français, CNRS, p.250.)

24) Marcel Raymond, *Le cheminement d'Albert Béguin 1930-1940*, préface dans Albert Béguin, *Création et Destinée II, La Réalité du rêve*, Seuil, p.27.

25) *Ibid*., p.16.

26) Albert Béguin, *L'Âme romantique et le rêve*, XIV.

27) *Ibid*., XV.

28) *Ibid*., XVII.

29) *Ibid*., XV.

30) Marcel Raymond, *Le cheminement d'Albert Béguin 1930-1940*, p.26.

L'aventure pour « l'invisible » d'Albert Béguin

— « L'âme romantique » et Balzac —

Maiko TOKAI

En comparant deux chefs-d'œuvre d'Albert Béguin, *L'Âme romantique et le rêve*, et *Balzac visionnaire*, nous tenterons de démontrer son « identification critique ».

Dans la mesure où le critique juge que « l'ignorance » est « notre véritable condition », il ne choisit que les poètes qui portent cette idée, la « présence » ; autrement dit, ce quelque chose que les hommes ne pourront jamais saisir. Il s'identifie alors aux poètes qui recherchent « l'invisible » dans le rêve, l'inconscience, ou leur propre enfance. Parallèlement, il souligne une importance primordiale : « l'invisible » doit se présenter dans la réalité visible. Et de fait, Béguin donne la primauté à Balzac en le qualifiant de « visionnaire ». Il apprécie davantage les romans « réalistes » que les romans « idéalistes » chez le concurrent à l'état civil, pour sa force de « visionnaire » susceptible de prévoir la « présence ». A côté des autres poètes de « l'âme romantique » qui poursuivirent la « présence » dans le rêve, le « visionnaire » s'affronte alors à la réalité pour le dévoiler.

En conclusion, les poètes de « l'âme romantique », Balzac et Béguin, se sont attachés à nous exposer « le symbole et la manifestation de l'invisible » sous le voile des poèmes, des romans et de la critique.